

北海道の徐福 2 題

池上正治

- 【補遺】 山梨・富士吉田の「徐福納骨櫃」
秋田・男鹿の蘇武塚・屋敷
中国・西安の西郊外にある蘇武墓
四国の徐福

はじめに 津軽海峡を越えた北海道は、徐福の空白地帯とされてきた。だが、やはり「調査なくして発言なし」（毛沢東）である。2002年11月、富良野にある静修熊野神社のご神体（童男童女？）を確認した。2010年5月、旭川の秦家には「徐福を祖」とする家系図のあることを確認した。この2題について詳しく報告する。
また、四国の徐福についても、最後の機会であり、時間の許す範囲で、紹介してみたい。

北海道・富良野の会場で、徐福家系図のサプライズ！

徐福ロマンツアー（JRT、主催＝山本弘峰）は、その参加者の国が多く、講演して回った場所が広いという点で、空前絶後であろう。中国大陸・台湾・韓国・日本から超70人が出席し、京都・新宮・北海道・青森・東京などで講演とパネディスを行なった。それらの会場の参加者の総計は、超500人。富良野では、静修熊野神社でご神体（童男童女？）を拝見、会場では想定外のサプライズ！

旭川の秦家の家系図には、徐福の直系と書かれていた

8年後、すでに秦謹衛さんは他界されていたが、その長女から歓迎する旨の電話があり、旭川の秦家へ。一族郎党の見守る中で、富良野でみた家系図を拝見し、すべて写真に収める。その場で簡単に解説し、詳細な読解は宿題として、持ち帰る。

北京の日中友好交流会議で、徐福のセッションを設定

日本と中国の間にかつてあった「窓口」は、両国の交流を独占していた。国交の正常化（1972）後、特に1980年代以降、状況は大きく変わる。だが、中国側の中日友好協会と、日本側の日中友好協会とは、一定の役割を演じてきている。両者の会議が隔年、北京ないし東京で開かれる。友好交流会議である。1998年2月、北京での会議で、初めて徐福が話題になり、専門のセッションが設けられた。中国および日本の徐福ゆかりの地の代表が報告、それを聞く会場は熱気に包まれた。四国の高知県から参加した田中一孝（全通労組・四国執行委員）さんと名刺交換、現地調査を約束。

1回目の現地調査、2000年、徐福の顕彰碑を確認

2年後の2000年、北京での約束を果たすべく、高知へ飛ぶ。田中さんの案内で、佐川（さかわ）町役場を訪れ、虚空蔵（こくうぞう）山を望む五位山公園にあった「徐福顕彰碑」を確認することができた。田中さんの事前調査では、それ以上の資料や伝承はなさそうだった。

2回目の現地調査、2015年、現地を詳細に調査

15年後、2015年2月、この間の「蓄積」すなわち、

『須崎風土記』橋詰延寿 1961年 須崎高校生徒会・須崎工業高校生徒会

『高吾北文化史 第2巻』明神健太郎 1963年 自費出版

（『佐川町史 下巻』佐川町役場 1981年 佐川町役場）

『佐川の昔ばなし』近沢二助 1982年 佐川民話の会

『土佐の神々第2集』広谷喜十郎 2005年 高知県神社庁

を持ち、再び、高知へ飛ぶ。すでに町議（津野町）になった田中さん、多くの資料に驚きながら、こちらの要望どおり、詳細な現地案内をしてくれた。例えば、柴折（しお）り峠、鉾ヶ峰（寺）、山崎記念天文台の碑文、虚空蔵山の頂、そこから見下ろす海、鳴無（おとなし）神社から見上げた虚空蔵山など。

長宗我部元親のこと

長宗我部元親（ちょうそかべ・もとちか 慶長4、1599年没）は、四国に雄飛した戦国大名であるが、自分が秦河勝（はたかわかつ 6世紀）の末裔であることを公言して憚らなかつた。彼の菩提寺は雪蹊寺であるが、その墓は別の場所にあり、やや寂しい印象だった。

おわりに 徐福は中国で生まれ、韓国を經由し、日本で死んだ — 李連慶（初代・中国徐福会会長）。

この名言に凝縮されるように、2000年以上の昔に実在した人物・徐福の事跡は、21世紀の今日も、アジア3国に共通の話題をあたえている。その伝承の悠久さと、関係する範囲の広さは、ギリシア神話のそれを凌駕している。われらが国と国の関係を考え、人と人との関係を思考する時、徐福の精神は、きわめて示唆に富むものであることを、再認識したい。